

上久下の大数珠

久下公民館長 栗原保夫

地藏堂内に、永く埃まみれに吊されていた大数珠が、公民館の講座を機縁に、日の目を見ることになった。「上区に伝わる大数珠」と言う題で講座に取り上げたのがきっかけである。講師は菅谷益太郎先生であった。

大数珠は、長さが約10m。玉は桐製、紐は麻製である。小玉（直径約5cm）は215顆あり、それを108顆と107顆に分け、その間に2つの大玉（直径約10cm）が挟み込まれている。この大数珠は「百万遍」という行事に使われたものである。

百万遍の謂われについては、元弘元年（1331）8月、京都に疫病が流行し、それをお嘆きになった後醍醐天皇が知恩寺に対し、疫病退散の祈願を命じた。善阿空円上人という方が、7日間不眠不休で念仏を唱えながら数珠を繰られた。すると、疫病が治まり、平穏が訪れた。後醍醐天皇は大層喜ばれ、上人に「7日間で何遍念仏を唱えたか」と尋ねたところ、上人は「およそ百何遍」と答えたという。それ以降、京の街に災難が起これると、この数珠繰りが行われ「百万遍」といったという。それが徐々に民衆の間に広まっていった。

久下の「百万遍」については、どこで、どう行われていたか知る人はいない。制作年代については、天保十三年以降とされているが、あまり使われていなかったようである。それがかえって、「保存状態がよく、製作された当時の情報を読み取ることが出来る」というのが文化財指定の理由である。

皮肉なことだが、私たちは今「神秘的なものへの畏怖・祈り」というものを、忘れかけているのではなからうか。



（熊谷市公協だより 第44号 平成18年より）